

氏 名 やまもと よしみ
山本 好美

学 位 博士（芸術学）

学位記番号 博（芸）乙第4号

学位授与年月日 平成30年3月31日

学位授与の要件 学位規程第3条第4項該当

論文題目名 「体書」の現代的展開

審査委員 主査 山口 義久

副査 櫻木 晃彦

同 林 勇気

1. 論文内容の要旨

本研究の要旨は以下の通りである。

現代日本の文字文化は大きな変化の時を迎えている。印刷文字とモニター上の文字に囲まれた日々の暮らしの中で、手書き文字を目にする機会は多くはない。手を使って文字を書く場面は減少した。まして、体に文字を書くという行為は日常的に行われているとは言いがたい。一方、その成立時より今日に至るまで、体を使って書くという普遍性に裏打ちされた存在である文字と体の関係は、その意味を常に書き換えながら存続している。

両者の結びつきが希薄になっている時代であるがゆえに、文字と体の関係性に焦点を当てた考察の必要性が増している。『琵琶秘曲泣幽霊』に語られたような意味での、人の体に文字を書く行為は可能か、そしてそれはどのような意味付けのもとに成立するのかという問題の答を求め、現代という時代に応じた創造的な芸術の可能性を示す事を本研究の目的とする。

本論文は、体に文字を書く行為を「体書」と呼称する。そして、ここで考察の対象とする「体書」を、「生きた人間が他者の生きた体に意味を持つ文字や言葉を書き、その行為を通じて書く者と書かれる者の間に或る種の「場」が開かれること」と定義する。この定義にはさらに、書くことが半永久的な施術ではないことと、書くものと書かれるものに意思疎通が可能であることという二つの条件が付け加えられる。

第1章では、体に文字を書く行為の歴史が考察される。入れ墨とアヤツコは、文字を仲立ちとして、人と神や仏などの人知を越えた者との関係の上に成立していて、いわゆる魔除けなどの身を守る働きを期待した呪術的な意味合いを含んだ行為として捉えることができる。これらは、さきの定義に付け加えられた二つの条件によって、「体書」の範囲からは除外されるが、体に文字を書く行為として、「体書」活動の意義への繋がりを示している。

第2章では、論者の「体書」との出会いと活動が紹介され、論者が「体書」活動を通じて得た実感や、体験者から聞き取った感想から「体書」の意義が考察される。体験者によって語られた言葉の中には、たとえばパワー・活力・元氣・力の創出との感想があり、スピリチュアルなものの流入、さらに呪術的なものを感じたとの感想もあった。それらは文字を書くという身体行為に接近する視線でもあり、俯瞰する感想でもある。それが自らの体と心を知る契機ともなっている。それらさまざまな感想と論者自身の経験を踏まえて本章は、「体書」

は、文字を仲立ちとした対話の「場」でもあり、筆を通じて伝わる手の動き、相手の呼吸や肌のぬくもりなどを通じて情動を感じる「場」となり、時として両者の関係を通じて気力が交流し、増幅しつつ、互いの生命感を高め、生を活性化させる「場」ともなり得ると指摘する。

第3章では、『琵琶秘曲泣幽霊』が取り扱われる。同書は各地に伝承されている「耳無し芳一の話」を素材とした江戸中期の出版物である。いわば「体書」の原点とも言える、和尚が芳一の体に文字を書く行為が開いた「場」が持つ意味の考察から、文字や言葉そのものの呪術的力、仏教の経文の霊威など、同話に内包されている文化的背景の多様な要素が明らかにされる。さらに、そこに描かれているのは、自らの身の危険に気づき、生きることを願う芳一と、彼の命を守ることを真摯に願う和尚が開いた「場」であったこと、体に文字を書きかけられる行為は、芳一の命を守ることであっただけでなく、さらにその後の新たな人生への「回心」に繋がったことが指摘され、そのようにして、和尚と芳一の間には、他者を自己に取り込んで共創的な対話を行える「場」が成立していると論じられる。

第4章では、「体書」の芸術的側面について考察がなされ、他の表現との比較を通じて「体書」の特色が確認される。「体書」は伝統的な「書」芸術の延長線上に位置するとともに、現代芸術におけるパフォーマンスとしての要素を色濃く持っている。書かれた文字は、書く者の手を通して産み出された創作物であり、皮膚に文字を書かれた者は、その支持体という関係を保持する一方、同時に表現者でもあるという仕方で、「体書」は、両者が共同して作り出す空間であるが、時には第三者の眼前でも行われることが「体書」の特色である。その一方で、「体書」が開く「場」は、自らを表現することによる自己の内面および相対する者との対話の「場」であり、共鳴や共振のおこる「場」でもある。これは、見る者を含めた三者が、自らの本来的な力への気づきの場ともなる。このような面から、本章は、新たな書芸術としての「体書」の成立可能性を示している。

結論では、伝統的な「書」芸術の要素と現代芸術的なパフォーマンスの要素を併せ持つ「形」と、「体書」が開く上述のような「場」とが、「体書」が創り出す新たな芸術性であると論じられる。これが、実体験から遊離した仮想現実が身近になった現代において、体に文字を書く行為の展開としての「体書」が持つ新たな意義であるということが、本論文の結論である。

以下に、本論文の目次を掲げる。

序論

始めに

先行研究

本論の構成

第1章 文字と身体に関わり

第1節 「体書」の歴史と成立条件

第1項 「体書」の定義

第2項 「体書」の歴史

第3項 本論が取り上げる研究範囲

第2節 「体書」との巡り会い

第2章 実践の場からの視点

第1節 「体書」の実践から

第2節 「体書」が開く「場」

第3章 文字文化に見る体に文字を書く行為

第1節 「琵琶秘曲泣幽霊」の背景 — 霊に対する認識と変遷 —

第1項 漢字の持つ呪術性

第2項 日本の古代社会と霊

第3項 宗教と霊威

第4項 日本の文字の呪術的要素

第2節 芳一は何ものか

第1項 琵琶法師の社会的位置付け

第2項 芳一と幽霊との交感が可能であった理由

第3項 聴覚・視覚の位置付け

第3節 経文を体に書く行為の意味するもの

第1項 経文のもつ意味領域を体感させる方法

第2項 幽霊から見えなくなった芳一の体

第3項 書かれた経文の意味

第4節 現代的視点からの考察

第1項 なりかへりから回心へ

第2項 「体書」の視点からの読み解き

第4章 芸術的な視点から ― 文字と身体の間をめぐって ―

第1節 他の身体表現との共通点と差異

第1項 ボディペインティングやフェイスペインティングとの比較

第2項 「書」と「体書」との比較

第3項 近代前衛書と「体書」

第2節 体を書く・書かれることの意味

第1項 体を書く・書かれること

第2項 触れる・触られること

第3節 現代芸術の中に位置する「体書」

第1項 現代社会が求める「場」

第2項 「体書」のパフォーマンス的要素

第4節 「体書」の持つ関係性

第5節 「体書」の新たな芸術性

結論

新たな意味付け ― 身体と文字との関係を書き換え続けること ―

残された課題

巻末資料集

「琵琶秘曲泣幽霊」原文と解説

体と文字の関係の歴史資料

仏教信仰に由来する書籍

文字に関連する伝統芸能

重要語句の定義と解説

「耳無し芳一の話」の類話の要約一覧と分類

参考文献一覧

2. 論文審査結果の要旨

(1) 研究テーマの独自性

論者は、武田憲幸氏との共著『体書写影』で書を担当しているように、「体書」の実践者として活動してきた。そのような実践者の見地から「体書」の意義を考察するという研究は、類を見ないものである。そのことは、小さく限られた範囲にテーマが限局されることを予想させるが、本論文は、メルロ＝ポンティ、鈴木大拙、白川静らをはじめとする思想家・研究者を援用しつつ、多様な視点から考察している点が特長であり、それによって本論文の内容が幅広いものと

なっている。なかでも、『琵琶秘曲泣幽霊』を「体書」の観点から解釈するという試みは、論者ならでの研究と言える。

(2) 研究方法とその成果

問題の性質上、文献を通じての研究は上記『琵琶秘曲泣幽霊』が中心となり、あとは考察を支えるための文献に限られ、研究の軸足は論者の「体書」の実践をはじめとする芸術活動を通じての考察に置かれる。とりわけ、「体書」の（書かれる側の）体験者の感想が本論文では大きな役割を果たしているが、それに対する論者の考察を通じて、「体書」が開く「場」という視点が得られ、これが『琵琶秘曲泣幽霊』の解釈につなげられる点がこの論文の成果の一つである。さらに、そのような場を開く「体書」の営みが、現代芸術的なパフォーマンスの側面と相まって、新たな創造的芸術の可能性を示しているという指摘が、本論文の結論ともなっている、もう一つの成果である。

(3) 残された課題

本論文は「体書」の実践者の考察として、その内的な意義を明らかにしようとしたものであるが、「体書」の芸術的な意義を理解するためには、芸術論的な見地からの考察も必要と思われる。今後の更なる研究が期待される。

3. 最終審査結果

以上、本研究の独自性、文献その他を活用する研究方法、一定の結論を導く論理的思考という三つの観点から検討した結果、審査委員一同、一致して本研究が博士の学位論文の水準に到達していると結論づけた。